

東の飛鳥（飛鳥時代前期）

飛鳥時代がおよそ西暦600年〜700年頃と前回記しました。今回は、もう少し詳細に触れてみましょう。587（用明2）年4月9日に用明天皇が崩御すると蘇我大臣馬子は、6月に穴穂部皇子と宅部皇子を殺害します（奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳の被葬者はこの2名の皇子とする説もあります）。7月に馬子は諸皇子や群臣と共に物部大連守屋を滅ぼします。この時の皇子らには泊瀬部皇子（後の崇峻天皇）や竹田皇子（敏達天皇の皇子、母は後の推古天皇）、厩戸皇子（聖徳太子）がいます。

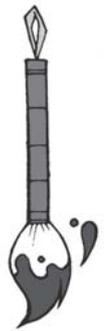
この戦いに勝利し、厩戸皇子は摂津（大阪）に四天王寺を馬子は飛鳥の地に法興寺（飛鳥寺）を建立したと伝えられています（四天王寺は出土瓦から法隆寺若草伽藍とほぼ同時期の7世紀初頭と考えられており伝記とは一致しません）。守屋を滅亡させ、これ以前の相伴大連金村の失脚と併せて、馬子は政治・軍事の全権力を手中にします。以後、教科書などで習う馬子―蝦夷―入鹿の三代にわたる政治主導が、645年の乙巳の変（教科書では大化改新）まで続きます。

物部守屋も蘇我氏も現在の大坂府南河内周辺に所領を持っていましたが、守屋を滅ぼしたことで、蘇我氏はほぼこの南河内地方と

もに中河内地方もすべて手に入れます。この南河内地域と奈良盆地の東南部の磐余地域（奈良県桜井市西南部）から香久山周辺の地に6世紀代、政治の中心として王宮が置かれます。この磐余の地は、水陸交通の要衝で、北は（京都府）宇治・山科方面、東は（三重県）伊賀・伊勢方面へ、西は（大阪府）河内や住吉津や難波津（港）、南西は紀州・紀ノ川河口（和歌山方面）へと利便性の高い土地であったわけです。この南の地は後に藤原京の一部として利用されます。飛鳥はこの磐余の更に南に位置し、三方が山や丘陵に囲まれ決して利便性に高い地域ではないのですが、防衛拠点として都を配置するには適していた地域と考えられます。

592年11月、馬子は崇峻天皇を殺害します。翌12月には蘇我稲目の娘と欽明天皇の間に生まれた推古天皇が最初の女性天皇（女帝）として飛鳥豊浦宮で即位します。この推古天皇の即位から皇極4（645）年（乙巳の変）までを飛鳥時代前期と区分することもあります。

内乱の中で権力を手にした蘇我一族は防衛拠点として優れた飛鳥の地（飛鳥川周辺）に本宗家や一族の屋敷を造ります。飛鳥の地はこれ以前から渡来系氏族である倭漢氏が入植



下野市教育委員会 文化財課

し、用水や灌漑施設などの開発を行っていました。6世紀後半から末頃に倭漢氏と結びつきが深かった蘇我氏が、守りやすく開発の進んでいたこの地を拠点としました。有名な「石舞台古墳」は蘇我馬子の「桃園の墓」と推定されており、蘇我一族の氏寺である「飛鳥寺」が建立され、蝦夷や入鹿の家は甘樫丘付近にあったと想定されています。

600年頃には蘇我氏三代の専横が目立つようになり、蘇我一族の血筋である推古天皇や厩戸皇子も大臣馬子と対立するようになります。蘇我氏優勢な中、推古13（605）年、厩戸皇子を中心とする上宮王家は飛鳥の地を離れて斑鳩に斑鳩宮を造営します。後に斑鳩には現存する最古の寺院である法隆寺が建立されます。政治・文化の中心は飛鳥と斑鳩に二極化します。このように500年代後半から672（天武元）年6月の「壬申の乱」まで、畿内政権では内乱が続きます。では、東国はどうでしょう？『日本書紀』に記載されている記事で伝承性が高いため真偽は不明ですが、530年代に「武蔵国造の乱」と称される内乱があったようです。下毛野国では記録がないため不明ですが、大きな争いは無かったようにも考えられます。（次号へつづく）